



Title	水準低下批判に対する反論 : Slogan に対する再考
Author(s)	徐, 晨倚
Citation	研究論集, 23, 45 (左) -62 (左)
Issue Date	2024-01-25
DOI	10.14943/rjgshhs.23.145
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/91084">http://hdl.handle.net/2115/91084</a>
Type	bulletin (article)
File Information	05_rjgshhs_23_p045-062_l.pdf



[Instructions for use](#)

# 水準低下批判に対する反論

— Slogan に対する再考 —

徐 晨 倚

## 要 旨

本稿は Drake Parfit による水準低下批判について分析し、先行研究による批判と筆者独自の批判を取り上げることで、水準低下批判 (Leveling-Down Objection) およびその根底にある Slogan を批判し、平等主義を擁護した。水準低下批判は Derek Parfit が論文「平等か優先か」の中で論じた概念で、平等それ自体に価値があると考えられる目的論的平等主義への反論として考案されたものである。Parfit によれば、平等はそれ自体で価値を持つということは、不平等の消滅もそれ自体で価値を持つことを意味する。そのため、境遇の良い人の生活水準を境遇の悪い人のと同じ水準に下げること (水準低下) による不平等の消滅は最終的に悪い帰結をもたらすが、不平等が消滅し、何かしら道徳的善さが生じることになる。Parfit は目的論的平等主義はその批判を回避できないとし、代わりに優先主義を支持すべきだと論じた。しかし、水準低下批判及びその基礎にある Slogan のどれも理論的な基礎が欠けており、比例正義や非同一次性問題をはじめとする反論に直面しなければならない。ゆえに、Parfit の平等主義批判は説得力のあるものではないと結論づける。

## 1. はじめに

分配的平等主義理論における重大な課題として、水準低下批判は盛んに論じられている。水準低下批判 (Leveling-Down Objection) は Derek Parfit が論文「平等か優先か」(“Equality or Priority?” 2000) の中で論じた主張である。当論文において、Parfit は従来の分配的平等主義理論を目的論的平等主義と義務論的平等主義の二つに分けて、平等それ自体に価値があると考えられる目的論的平等主義への反論として水準低下批判が考案されたのである。その内容は以下のものだ。平等はそれ自体で価値を持つということは、不平等の消滅もそれ自体で価値を持つことを意味する。目的論的平等主義者の考えによれば、境遇の善い人の生活水準を境遇の悪い人の

生活水準と同じレベルに下げること（水準低下）による不平等の消滅は最終的に悪い帰結をもたらすかもしれないが、**境遇の善い人の水準低下によって何かしらの善さが生まれたことになる**。Parfitは水準低下によって善が生まれることを批判し、目的論的平等主義は水準低下批判を回避できないため、優先主義が目的論的平等主義にとって代わるべきだと主張した。

目的論的平等主義者である Larry Temkin は、水準低下批判の根底にあるのは、彼が「Slogan」（以下 Slogan をこの意味で使う）と呼ぶ主張であると指摘する（Temkin 2000）。

（Slogan：ある状況がほかの状況に比べ、より悪い（または善い）といえるのはその状況中の誰かがより悪く（または良く）なった場合に限る。）<sup>1</sup>

Slogan は非常に広く使われており、パレート最適や Rawls の格差原理などの理論の根底にあるのも Slogan である。一方で、Slogan は広範囲に運用されているにもかかわらず、それを支える理論的基礎となっているのは我々の直観のみである。**Slogan は本当に真なのか、どの領域においても常に真なのか**という疑問が生じるのも当然である。

本稿はこの疑問を出発点とする。まず、筆者は水準低下批判と Slogan について詳しく解説する。そして、Temkin による Slogan の批判や水準低下批判による優先主義批判などを紹介する。最終的には Slogan と水準低下批判に反論し、目的論的平等主義を擁護することを本稿の目標とする。

## 2. 水準低下批判とはなにか

論文「平等か優先か」において、Parfit はまず従来の平等主義理論を目的論的平等主義（Telic View）と義務論的平等主義（Deontic View）に分ける<sup>2</sup>。その線引きの基準は平等に対する見方である。というのも、Parfit によれば、我々の平等に対する見方は二種類ある。

A：ある人が他の人に比べてより悪い境遇にいることはそれ自体で悪い<sup>3</sup>

B：平等を追求する理由は、平等それ自体の価値ではなく、他の道徳的な理由に基づく

Parfit は A という見方を「平等原則」（The Principle of Equality）と呼ぶ。それをとる立場、すなわち、**平等をそれ自体で価値あるものとする立場はすべて目的論的平等主義と呼ばれる**。この立場によれば、「ある人々が他の人々よりも境遇が悪いとすれば、それはそれ自体として悪い」

<sup>1</sup> Temkin (2000) P.132 筆者訳

<sup>2</sup> Parfit のこのような線引きの仕方は必ずしも正しいとは言えない。実際、Martin O'Neill の論文、“What Should Egalitarians Believe?”のなかで、この線引きの仕方は間違っているとされ、平等主義の最も一般的な形のものを見落としていると論じられた。というのも、ほとんどの平等主義者によれば、平等は道具的な価値をもち、そして、それが不公正にだけ還元されるわけではないのである。詳しくは、本稿の第6節と Martin O'Neill 2008 を見よ。

<sup>3</sup> Parfit (2000) P.84 筆者訳

のである。Temkin の多元主義的平等主義やいくつかの運の平等主義はこの立場に当たる。

一方で、義務論的平等主義は A を拒否し、B を主張する。つまり、我々が平等を追求するのはそれに内在的な価値が存在するからではなく、公正 (Just) などほかの道徳的理由に基づいている。したがって、義務論的平等主義者によれば、不平等な帰結であることは必ずしも悪いというわけではない。

義務論的平等主義は多くの問題に対応できないとして Parfit は否定的な態度を示すが、目的論的平等主義にも重要な欠陥があると彼は指摘する。その場合、目的論的平等主義に対する重要な反論の一つは水準低下批判 (levelling down objection) である。

先述したように、Parfit が言う目的論的平等主義とは平等それ自体を目的とし、平等それ自体の価値を認める立場である。この立場は平等の内在的価値<sup>4</sup>を認めることから、目的論的平等主義と呼ばれている。日常生活において、我々は暗黙裡に、平等を善いものであると認識している。このような主張の多くは平等によってもたらされる影響が善いこと、つまり、平等は道具的な価値を持つことを含意すると思われる。というのも、平等が欠如している社会において、人と人の間の対立や社会的混乱の発生は容易に想像できるからである。しかし、仮に、平等が持つ価値はそれにとどまるとすると、平等という概念は空虚なものになりかねない。なぜなら、その場合、平等を追求することはこれらの混乱や対立を回避するためだけであり、それ自体としてなんの価値も持たないからである<sup>5</sup>。

このような平等の内在的価値を認めるかどうかの立場の分岐は大きな違いを生じる。というのも、もし平等が内在的な価値を持たないとすれば、**不平等の消滅は純粋に道具的な価値しか持たず、その影響が現れる場面でのみ価値を持つことになる**。一方で、平等が内在的価値を持つならば、**不平等はその影響があるかないかにかかわらず、それ自体で悪である。不平等の消滅は、平等と同じく、それ自体善いことである**。

この平等の内在的価値に関する主張によって、目的論的平等主義は水準低下批判に直面することになる。Parfit は以下のように述べる。

仮に、より裕福な人々が何らかの不幸に見舞われ、他の人々と同じような悪い状況に陥ったとしよう。この出来事は不平等を解消するものであるため、たとえ一部の人にとってより悪く、どの人にとっても良くならないにしても、目的論的平等主義者にとってはこのことはある意味において好ましいに違いない。多くの人はこの主張が馬鹿げていると思うだろう。私はこれを水準低下批判と呼んでいる<sup>6</sup>。

---

<sup>4</sup> それ自体で持つ価値は必ずしも内在的ではないと Mayson は彼の論文のなかで主張しており、詳しいことは後で述べる。

<sup>5</sup> この主張に対する批判が存在し、詳しくは第6節を見てください。

Parfitの主張をよりよく理解するためには、さらなる説明が必要だろう。Parfit自身も述べているように（ある意味においてという言い方から）、水準低下批判で重要なのは、このような水準低下が間違っていることでも悪い帰結をもたらすことでもない。重要なのは**水準低下を行うこと**で、**何か善いものが生じたこと**である。表1を見よう。

	裕福な人々の福利水準 <sup>7</sup>	貧しい人々の福利水準	現在の福利水準の合計	平等の価値
現在	20	10	300	E <sup>8</sup>
水準低下後	10	10	200	E'

ある地域には、等しく裕福な人々が10人、等しく貧しい人々が10人いるとしよう。裕福な人々の福利水準はそれぞれ20で、貧しい人々の福利水準はそれぞれ10である。現時点において、共同体の福利の合計は $20 \times 10 + 10 \times 10 = 300$ である。水準低下を行えば、裕福な人々の福利水準は20から10へ低下する。「水準低下後」の共同体にいる**個人の福利だけを単純加算すると** $10 \times 10 + 10 \times 10 = 200$ となる。しかし、前述したように、目的論的平等主義は平等はそれ自体で善いものとする。そのため、全体的な善さを計算する際に、平等それ自体の価値（ここはEとE'で表す）を合計に足す必要がある。したがって、すべてを考慮すると、水準低下後の共同体の福利の合計は $200 + E'$ である。

「現在」の道徳的善さ： $300 + E$

「水準低下後」の道徳的善さ： $200 + E'$

$E' > E$ （「水準低下後」はより平等な帰結である）

E'の正確な値はこの場合重要ではない。平等主義者を含むほとんどの人は水準低下はより悪い帰結をもたらすこと（ $300 + E > 200 + E'$ ）に合意するからである。問題となるのは、水準低下という行為は、帰結の合計の善さを悪化させる一方で、一部の人の利益を大きく損ない、帰結の中のすべての人に利益をもたらさないにもかかわらず、善を生じることである。このことはParfitによれば、ほとんどの人にとって非常にばかげていることだ。

<sup>6</sup> Parfit (2000) P.98 翻訳と下線は筆者によるものである。

<sup>7</sup> 本文において、福利水準という単語の意味は厚生や厚生への機会、潜在能力などの諸概念を含むものとして使われる。つまり、平等の通貨は何なのかという問題に対して言及しない。

<sup>8</sup> ここでEの値は重要ではない。0と論じる人もいれば、価値があると論じる人もいる。しかし、E'はEより大きい値つまり大きい価値を持つことは自明である。

### 3. 水準低下批判についての分析と Slogan

前節で解説した水準低下批判は、Parfit が目的論的平等主義への反論として考案したものであるが、Parfit の意に反して非常に広い射程を持つ。Parfit の二つの主張「水準低下によって何らかの価値が生まれることはばかげている」と「目的論的平等主義は否定すべき」の意味を理解するためには、さらなる分析が必要である。

Parfit は、水準低下という行為はある意味において善であることは多くの人にとってばかげていると述べた。言い換えれば、水準低下によって善が生じることはばかげている、あるいは直観に反する。これは自然に、「何によって善をもたらすことはばかげていないのか」、「何によって善をもたらすのは我々の直観に適合するのか？」という問題を我々に呈する。

目的論的平等主義は、平等それ自体に価値があると主張する。この考えによれば、平等それ自体は善いものとされる。もちろん、ほとんどの平等主義者は、人々の福利水準もある帰結を評価する際に価値のあるものとしてカウントするであろう。一方で、Parfit の水準低下批判は、平等それ自体の価値をはじめとする個人に影響を与えない価値の存在を否定し、人々の福利水準にのみ価値があると主張する。この主張は「**個人影響の主張**」と呼ばれる。

〈もしある帰結が、誰にとっても悪いものではないなら、それはいかなる点においても悪いものにはなりえないということが、一般的な考え方である。これを個人影響の主張 (Person-affecting Claim) と呼ぶことができる。〉<sup>9</sup>

Parfit の弟子でもある Larry Temkin は、この主張を「Slogan」と呼び、より具体的な定義を定めることで、定式化した。

〈Slogan：ある状況がほかの状況に比べ、より悪い（または善い）といえるのはその状況の中の誰かがより悪く（または良く）なった場合に限る。〉<sup>10</sup>

Temkin が定義した Slogan は間違いなく、目的論的平等主義と矛盾し、平等の価値を否定している。それを理解するために、以下の例を見よう。

二つの分配の状況 A と B が存在する。状況 A において、個人 X の福利水準は 100 であり、個人 Y の福利水準は 90 とする。一方で、状況 B において、個人 X' の福利水準は 50 であり、個人 Y' の福利水準も 50 である。目的論的平等主義によれば、平等はそれ自体で価値を持つため、状況 B は平等の価値という面において、状況 A よりも望ましい。しかし、Slogan によれば、状況 B のなかの誰も状況 A の時に比べて境遇が改善されていないため、**状況 B はいかなる面においても、状況 A より望ましくない**のである。ここから見てもわ

---

<sup>9</sup> Parfit (2000) P.114 筆者訳

<sup>10</sup> Temkin (2000) P.132 筆者訳

かるように、Slogan は平等の価値を完全に否定していることがわかる<sup>11</sup>。

Slogan は、哲学や経済学などにかかわる領域で、非常に広く使用されている。例えば、ロールズの格差原理やパレート最適などの理論は、Slogan を根底にもつ。一方で、Slogan は、その運用範囲が広いにもかかわらず、それ自身を正当化する理論はほとんど存在しない。というのも Slogan は、ほとんどの場合、自明な道徳的真理として扱われているからである。しかし、Slogan は果たして否定できないような命題なのだろうか。次節では、Slogan に対する批判をいくつか紹介する。

## 4. Slogan に対する批判

### 4.1 非同一性問題との矛盾

一つ目の批判として、Temkin は、Slogan と非同一性問題との矛盾を指摘した。非同一性問題 (Non-Identity Problem) も Parfit が提起した問題である。彼は、次のように述べた。

われわれが二つの社会的あるいは経済的政策のいずれかを選択するところであるとしてみよう。そしてこの二つの政策のいずれかの方が、生活水準が次の1世紀において少し高いとしてみよう。この結果は別の結果を含んでいる。いずれの政策をわれわれが選ぶにせよ、遠い未来に存在する人々は同一である、ということはない。(中略) われわれの二つの政策間の選択は将来の受胎のタイミングに影響するから、将来生まれてくる人々の中には、われわれが二つの政策の片方を選んだおかげで存在する人がいるだろう。もしわれわれが別の政策を選んだならば、これらの特定の人々は決して存在しなかっただろう<sup>12</sup>。

この主張を要約すると、「ある時点 T で異なる選択をすると、将来生まれてくる子供も異なる」ということになる<sup>13</sup>。

以上のことに基づいて、Temkin は、Slogan と非同一性問題の間に矛盾関係が存在すると指摘する。彼は図1でこのことを説明する<sup>14</sup>。

<sup>11</sup> Nils Holtug (2007) P.48-49 訳は筆者によるものである。内容は少し変更されている。

<sup>12</sup> Parfit (1984) P.361 和訳 P.493-494

<sup>13</sup> 生物学的非同一性と社会学的非同一性という二つの可能性は存在するが、本稿はそれについて言及しない。

<sup>14</sup> Temkin (2000) に基づいて作成した。

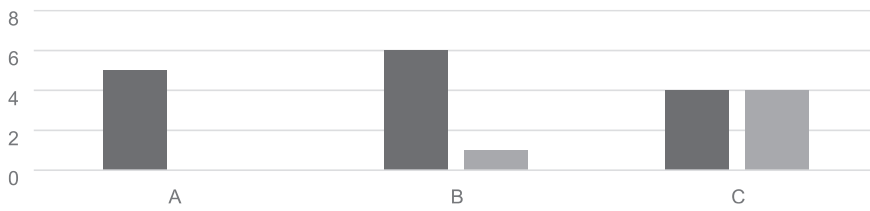


図 1

図 1 において A は現在存在する人々の福利水準を表したものである。B と C はそれぞれ二種類の政策が発令した未来の状況を示すものである。B と C のグラフの右側にある薄いグレー色の棒は将来世代の福利水準を表すものとする。B が表す政策は将来のことを考慮しないもので、その結果、現存する人々の福利水準がわずかに高くなるものの、将来世代の生活は貧しくなる。一方で、C が表す政策は将来世代のために資源を節約するものである。その結果、C の場合、現在存在する人々の福利水準はわずかに低下するが、将来世代の生活は今の人々と同じ水準を保つことができる。

多く的人是もなく、C のほうがより好ましいと判断するだろう。しかし、Temkin によれば、Slogan はこの主張と両立できない。それを理解するために、非同一性問題をより詳しく説明する必要がある。

Parfit の非同一性問題は P と Q の二つの主張を含む。

P : B と C の二つの帰結の中の子供は別人である。

Q : 存在しない誰かの利益を害することは不可能である。さらに言えば、誰かを出生させないことによって当該の誰かが害を被ることはない。

P と Q の二つの主張を踏まえて、B と C の二つの帰結にいる子供世代の福利水準をみると、**子供世代にとって善いか悪いかは帰結を評価する際に有用な基準ではない**ことがわかる。というのも、非同一性問題によれば、帰結 B に存在する子供と帰結 C に存在する子供は全く異なる個体であるとされる。C において子供の福利水準は明らかに B より高い水準にあるが、帰結 C に存在する子供は帰結 B の子供と同じ人物ではないため、**単純に二つの帰結の中の人々の福利水準の変動を比較することで二つの帰結を評価することができない**。

一方で、Slogan によれば、ある帰結が他の帰結に比べ、より善いと言えるのはその帰結のなかで**誰かの境遇がよくなった**場合に限る。このことは非同一性問題が示唆する問題に対しての我々の直観と矛盾する。というのも、これまでで述べたように、世代間問題の中には非同一性問題が存在し、二つの帰結の善さを比較する際において、帰結のなかの人々の境遇の善さの変化を判断の基準とすることができない。もし Slogan が正しく、**帰結の相対的善さは帰結のなかの誰かの境遇の改善のみに関連する**だとすれば、非同一性問題が疑問視する世代間の倫理問題に対して、我々は評価できなくなる恐れがある。つまり、上記の例でいうと、我々が帰結 B と帰結 C を比べる際に、使用できる基準は B と C の間でその帰結のなかの人がどれほど境遇



を改善されたのかというもののみである。それはつまり、非同一性問題が存在する場合において、我々はその比較ができないことを意味し、人々の直観に大きく反するものであろう。

Temkin の反論は、P と Q の二つの主張と Slogan の間の衝突に依拠ものである。非同一性問題の例において、我々は、C が B に比べてより善い帰結であるという強い直観を持っている。この事実は、Slogan が間違っているか、あるいは少なくとも非同一性問題が存在する場面において適用できないことを物語っている。

#### 4.2 水準低下批判そのものに対する反論

本稿が取り扱う二番目の批判は水準低下批判そのものに対するものである。Slogan によると、他の帰結に比べてある帰結がより善いと言えるのは、その帰結の中で誰かがより良くなった場合に限る。一見するところ、このことは自明であるように思われるかもしれないが、実際には、前節で述べた反論以外にも様々な反例が存在する。その一つとして、Temkin は、比例正義 (proportional justice) の概念を用いて、Slogan を批判した。

彼は次のように述べる<sup>15</sup>。

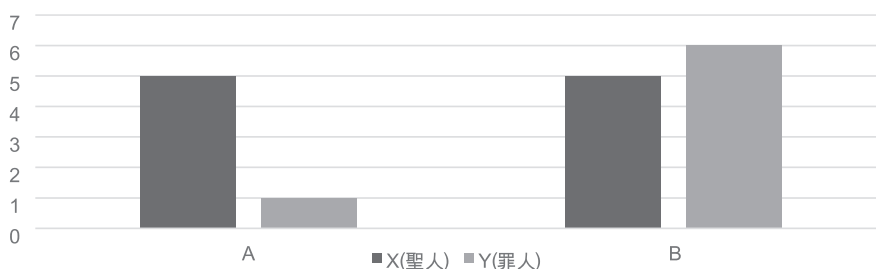


図2

A と B は、それぞれ選択できる将来の生活を表すものである。X は聖人<sup>16</sup>の生活水準を表すものであり、Y は罪人の生活水準を表すものである。さらに、A はこの二つのグループにいる人々のこれまでの行いと比例正義 (proportional justice) を正しく反映し、設定された値とする。明らかに、比例正義に従えば、A は B より優れているはずである。これは不思議なことであろうか。アリストテレス、カント、ロスなど、多くの人はそう思わない。しかし、Slogan によれば、B は A より優れているだけでなく、あらゆる点において悪くないとされる。これは、ほとんどの人にとって受け入れがたいことだと思われるであろう<sup>17</sup>。

<sup>15</sup> 図2は Temkin (2000) に参照して作成している。

<sup>16</sup> Temkin は聖人と罪人の定義を下していないが、道徳的に善いことをする傾向性のある人やこれまでにとくさんの道徳的に善いことをした人のどちらでも説明に支障がないように思われる。

比例正義という概念はアリストテレスに遡ることができる。彼によれば、二種類の平等が存在する。一つは数字的平等で、もう一つは比例平等である<sup>18</sup>。比例平等とは、分配が当該の人にとってふさわしい方法で行なわれることを指す。現代において、運の平等主義（Luck Egalitarianism）もまたふさわしさ（Desert）という概念を分配的平等に導入し、独自の正義論を展開している。

Temkin があげた例では、聖人と罪人が対比される。比例正義に従えば、聖人はその道徳的な卓越性により、高い水準の生活を得るのにふさわしい。一方で罪人はその反対で、低い水準の生活を得るのにふさわしい。B は比例正義に反しており、罪人は彼が得るのにふさわしい生活水準をはるかに超えるレベルの生活を得ている。このことに対して、義憤を覚え、A のほうはある面においてより善いと思う人がほとんどであろう。

しかし、福利水準にだけ限定していえば、A に比べ、B のほうは合計としてより高い水準を有していることは明らかである。というのも、B においては、聖人にせよ、罪人にせよ、どちらのグループも A に比べ、同等か、あるいはより高いレベルの福利水準を示している。もし、Slogan が正しく、ある状況がほかの状況に比べ、より善いといえるのはその状況の中の誰かがより良くなった場合に限るのであれば、福利水準において全般的に優れている B はいかなる面においても A より優れていると言わざるを得ない。そのため、もし Slogan を支持するのであれば、それは我々のふさわしさに対しての道徳的な直観に対して矛盾することとなる。

比例正義つまり、ふさわしさ（Desert）という概念について、運の平等主義者たちは長らく論じていた。ふさわしさの価値も我々の直観によって支持されている<sup>19</sup>。そして、Temkin が出した聖人と罪人の例は少なくとも、Slogan に対する反例として成功しているように思われる。というのも、聖人と罪人の例の中で、A がある面においてより善いと考えた直観は、個人影響以外の価値あるものの存在をほめかすのである。この直観の対立は Slogan に反対するひとつの理由となるだろう。

## 5. 優先主義と水準低下批判

Slogan の問題はこれまで述べてきたものだけではない。先述したように、Parfit は水準低下批判を取り上げることで、目的論的平等主義を批判し、優先主義を正当化しようとしている。しかし、Slogan のあまりにも広い射程により、優先主義も目的論的平等主義と同じく、水準低

---

<sup>17</sup> Temkin (2000) P.139 筆者訳 下線部は筆者によるものである

<sup>18</sup> Aristotle Nicomachean Ethics 1130b — 1132b p. 70–74

<sup>19</sup> 自由意志を否定することで、ふさわしさと平等は両立できない概念と論じることができる。ここはそれに触れない。

下批判に直面する恐れがある。このことを理解するためには、まず優先主義について説明する必要がある。優先主義について、Parfitは以下のように述べる。

〈優先論的主張：人々の境遇が悪ければ悪いほど、その人に対して利益を与えることがより重要になる。〉<sup>20</sup>

Parfitは利益を受け取る人の境遇と比例する道徳的重要性という概念（以下優先性と呼ぶ）を導入する。これは平等主義と大きく異なるところである。というのも、平等主義は相対的なものであり、平等は、本質的に、人々が所有している資源あるいは福利水準の関係にかかわるものである。ある状況が平等であるといえるためには、その状況の中の個人あるいは個体の状況を比較しなければならない。一方で、優先性は絶対的なものである。境遇の悪い人に利益をもたらすことの優先性は高いが、それは他の人と比べて境遇が低いからではなく、絶対的に福利水準が低いことにあるからである。つまり、優先性の算出方法が確定されていたら、同じ福利水準の人に対して、常に同じ値の優先性が付与される。それはほかの人が存在するかどうかと関係ないのである。

さらに、彼は続いてこう説明する。

功利主義者にとって、個々の利益の道徳的重要性は、この利益がどのくらい大きくなるかだけによる。優先主義者にとって、利益の道徳的重要性は、この利益がもたらされる人々の境遇の程度にも依存する<sup>21</sup>。

Parfitの主張からもわかるように、優先主義者にとって、道徳的重大性を持つのはその利益の大きさとその利益を享受する人の境遇の程度である。

以上のことを踏まえて、筆者はParfitの優先主義を以下のように正式に定義する。

〈優先主義：ある状況Aが他の状況Bより善いのは、優先性が福利水準と反比例に逓減し、かつ状況Aの中の人々の福利水準<sup>22</sup>と優先性の合計は状況Bの中の人々のその合計より高い場合のみである。〉<sup>23</sup>

優先性は以下の関数によってあらわすことができる。

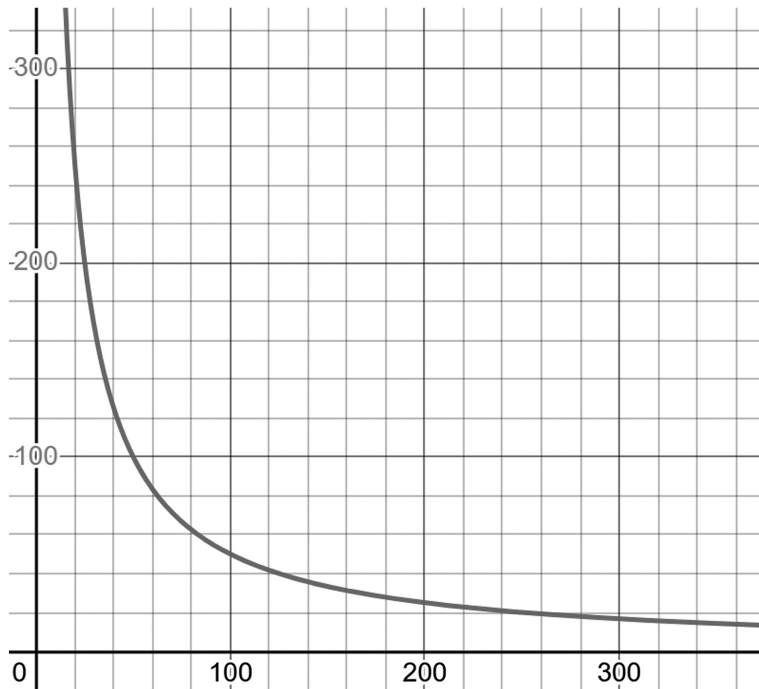
---

<sup>20</sup> Parfit (2000) P.101 筆者訳

<sup>21</sup> Parfit (2000) P.101 堀田義太郎訳 P.172 筆者による太字

<sup>22</sup> もちろん、福利水準の限界効用逓減も考慮しなければならない。

<sup>23</sup> この定義はIwao Hirose (2014) を大きく最小している。



この関数の Y 軸は優先性の善さを表しており、X 軸は当該の人の福利水準の善さを表している。この関数からわかる通り、福利水準が下降すると優先性の善さは増加し、無限大に向かって増大する一方、福利水準が向上すると優先性の善さは減少し、0 に向かって無限趨向することが示されている。つまり、優先性  $P$  は絶対的福利水準  $W$  と反比例関数的な関係にある。例えば、優先主義によれば、福利水準を 100 から 101 へ増加させることよりも、10 から 11 へ増加させることのほうがより大きな量の道徳的善さが生み出される<sup>24</sup>。それは 100 から 101 よりも、10 から 11 への改善の方がより大きい優先性を持つからである。

優先主義は優先性を導入することによって、「平等」という相対的な概念を用いることなく、平等な帰結にコミットすることができる<sup>25</sup>。しかし、優先主義も平等主義と同じように水準低下批判を受けるのは明らかである。

定義から明らかであるように、優先主義において道徳的に重要とされるのは福利水準の高さと優先性である。Parfit はこれを以下のように説明する。

<sup>24</sup> この 1 単位の福利水準は福利の限界効用逓減を考慮に入れた後のものである。

<sup>25</sup> 先述したように、優先主義において、便益の額が同じであっても、より境遇の悪い人に与えることのほうがより大きな善を生み出すために、最善な分配は平等な帰結をもたらす分配である。そのため、優先主義はしばしば「強い平等主義」（功利主義などの弱い意味での平等と対比するもの）の一種にみなされる。Parfit 自身も終始優先主義と称さずに、目的論（Telic view）と対照的な呼び方—優先論的（Priority View）と呼んでいることから平等主義の一種か改良版であるという考えが示唆される。

資源を境遇の悪い人に移転する場合、得られる利益は単に利益自体ではない。道徳的尺度で見てもより重要なものとなる。このように、帰結がよりよくなる方法は二つある<sup>26</sup>。

しかし、第3節で述べた Slogan の定義を振り返ると、優先主義が水準低下批判に直面していることは容易にわかるはずである。Slogan によれば、ある帰結の善さに影響を与えることができるのは、その帰結のなかの人の境遇の変化のみである。優先性は平等と同じように、直接的には帰結の中の個人の福利水準と無関係である。にもかかわらず、帰結の道徳的な善さに影響するため、優先主義もまた平等主義と同じ批判を受ける。再度、表1を見よう。

	裕福な人々の福利水準	裕福な人々に利益を渡す優先性	貧しい人々の福利水準	貧しい人々に利益を渡す優先性
現在	20	$P_1$	10	$P_2$
水準低下後	10	$P_2$	10	$P_2$

優先主義によれば、「現在」において裕福の人は20の福利水準を有しており、そしてその値に基づいて、優先性  $P_1$  が付与される。一方で、貧しい人々は10の福利水準を有しており、その優先性の値は  $P_2$  である。優先性はもともとの福利水準の値と反比例関係にあるため、 $20 > 10$  は  $P_1 < P_2$  ということを意味する。

「現在」の帰結の善さ： $(20 + P_1) + (10 + P_2)$

「水準低下後」の帰結の善さ： $(10 + P_2) + (10 + P_2)$

優先性逓減の法則： $P_2 > P_1$

水準低下により、「現在」の帰結の善さ  $(20 + P_1) + (10 + P_2)$  が「水準低下後」の帰結の善さ  $(10 + P_2) + (10 + P_2)$  になる。つまり、裕福な人の福利水準が20から10へ低下したとともに、優先性の値もまた  $P_1$  から  $P_2$  へ上昇したのである。

「現在」と「水準低下後」の差： $(20 + P_1) + (10 + P_2) - [(10 + P_2) + (10 + P_2)]$   
 $= 10 - (P_2 - P_1)$

言い換えると、優先主義によれば、「水準低下後」は水準低下によって、「現在」に比べて、10もの福利水準がなくなった。しかし、二つの帰結の善さの差は10ではなく、 $10 - (P_2 - P_1)$  で

<sup>26</sup> Parfit (2000) P.106 下線は筆者によるもの。

あり、 $(P_2 - P_1)$  の善さ<sup>27</sup> が水準低下によって生み出されたのである。ほとんどの人から見れば、これは平等主義が水準低下によって平等の善さを生み出すことと同じであろう。というのも、繰り返しになるが、水準低下批判によれば、ある帰結の中の相対的に境遇が善い人々をほかの人々と同じレベルまでに福利水準を減らすことによって生み出された平等は誰にとってもより善い福利水準をもたらさないにもかかわらず、善いことが生まれることは非常に不思議なことである。しかし、これまでの論証からもわかるように、同じことは優先主義にも言える。帰結の中の相対的に境遇の善い人をそのほかの人々と同じレベルの水準にまで減らすことで、彼らに対する優先性が向上し、道徳的に善いものが生まれたのである。よって、**優先主義も水準低下問題の射程の中にある。**

この結論の前提として、**優先性の上昇が帰結の善い属性であると見なしている。**優先性の上昇を帰結の悪い属性とみなすことで優先主義はこの批判を回避できると主張する人もいるかもしれない。しかし、極端的平等主義 (Extreme Egalitarianism) の主張者でもある Ingmar Persson によれば、これは別の重大な問題を引き起こすとされる。

彼は以下のように述べる。

しかし、これはより不合理なことを意味する。なぜなら、そのような優先主義は個人にとって全く悪くないにもかかわらず、個人が福利を享受する際に常に個人の福利の増加に伴い減少する何らかの悪があることを示唆する<sup>28</sup>。

Persson が主張したように、道徳的に悪いものとして、優先性を考えても、優先主義は Slogan から逃げることはできない。というのも、**道徳的に悪いにもかかわらず、我々の福利に全く影響を与えないものの存在それ自体は Slogan と矛盾する。**また、優先性を善悪無記のものとも考えることも問題を解決できない。なぜなら、**善悪無記でありながら、道徳的重大性に大きく影響するものの存在は、奇妙であり、Slogan と抵触するように思われるため、ほとんどの人によって支持されないからである。**したがって、優先主義は、優先性の道徳的価値について、どのように価値付けを行っても、水準低下批判と Slogan による大きな困難に直面することになる。

## 6. 非内在的平等主義と水準低下批判

先述したように、Parfit は分配的平等論を目的論的平等主義と義務論的平等主義に分け、目的論的平等主義は水準低下批判に対して無力であると主張した。一方で、義務論的平等主義は水

---

<sup>27</sup>  $P_2$  は常に  $P_1$  より大きいので、その値は常に正数である

<sup>28</sup> Persson (2007) P.301-302 筆者訳

準低下批判を回避できながらもその定義から、あまりにも多くの不平等から目を背けた<sup>29</sup>ことから、もっともらしくないとされた。よって、従来の分配的平等主義は失敗すると Parfit は主張する。この論証は**平等主義的理論はこの二つの種類のものしかない**ということを前提している。もし、この二つの理論がすべての平等主義理論をカバーしきれないのであれば、Parfit の議論は無効である。というのも、この二つの分類に属さない理論によって、水準低下批判は回避されるかもしれないし、かつ義務論的平等主義よりも広い射程を持つ非目的論的平等主義も存在しうるからである。

実際、Parfit の提唱する目的論的と義務論的の平等主義の分け方には多くの批判が存在している。例えば、Andrew Mason は目的論的平等主義の価値の内在性に疑問を投げかけた。彼によれば、内在的な価値には変化の可能性が存在する。彼は平等はまさにこのような変化可能な内在的な価値を持つものであると主張する。彼が定義したこのような平等主義は条件平等主義とよばれ、それによれば、平等は本質的かつ非道具的価値を持つが、それは少なくとも一部の人に利益をもたらす場合に限られる。

Martin O'Neill もまた Parfit の分け方に異議を唱えた一人である。彼によれば、この分け方は最も魅力的な平等主義的理論をカバーできていないのである。彼は以下のように述べている。

最も魅力的な形態での平等主義は、上記の意味での目的論的 (Telic) でも義務論的 (Deontic) でもない。Parfit の区別が見逃している平等主義の形態は、私が「非内在的平等主義」と呼ぶであろう道具的平等主義の異なるバリエーションである。… (中略) …これらの理由 (a) – (f) の一部に訴えるどんな見解にも「非内在的平等主義」という名前を付けよう。[(a) 不平等の軽減はしばしば苦しみと欠乏の消滅の条件である、(b) 社会的地位の不平等を引き起こし、それにより低い地位の人々が自分自身や他者から劣っていると見なされるようになる、(c) 不平等は受け入れがたい形態の権力と支配につながる、(d) それが自尊心、特に最も不利な人々の自尊心を弱める、(e) 不平等が卑屈さや従順な行動を生み出す、(f) 不平等が全体としての社会の健全な兄弟的な社会関係や態度を損なう]<sup>30</sup>

彼が主張したように、我々が平等を支持する理由はほとんどの場合、上記の様々な理由に由来する。平等の内在的価値についての判断を保留したとしても、我々は不平等を拒否する十分な理由がある。一方で、Parfit の分け方はこのような平等の道具的な価値に起因する平等主義の分類に失敗している。というのも、このような**非内在的平等主義 (Non-Intrinsic egalitari-**

<sup>29</sup> 全文でも少し触れたように、義務論的平等主義によれば、不平等は不正義である。不正義が存在しない事柄 (才能や生まれつき) に不正義が存在しないため、是正する必要がないのである。

<sup>30</sup> Martin O'Neill 2008: P121 筆者訳

anism) は平等それ自体の価値を否定、あるいは保留する立場をとり、ゆえに、目的論的平等主義ではない。かといって、非内在的平等主義は不正義以外の不平等にも気を配り、そのため、義務論的平等主義でもない。

では、どうして、非内在的平等主義は水準低下批判を回避できるのだろうか。再度表1を見よう。

	裕福な人々の福利水準	貧しい人々の福利水準	現在の福利水準の合計	平等の価値
現在	20	10	300	E
水準低下後	10	10	200	E'

水準低下批判によれば、「水準低下後」がある面において、「現在」よりも望ましいのはばかげている。というのも、Sloganによれば、水準低下は帰結の中の誰の福利水準も向上させないため、いかなる面においてもより望ましくないのである。しかし、非内在的平等主義によれば、水準低下によって、平等が向上し、不平等が消滅することによって、先述した(a) - (f)の理由によって、個人的、非個人的なメリットが存在し、何かしらの善さがもたらされたのである。つまり、言い換えると、裕福な人々の福利水準を10にすることで、社会全体の福利水準は何かしらの向上を果たしたのである。言い換えれば、平等の価値は福利の向上（この場合、**個人影響のもの**と**非個人影響のもの**の両方が存在する）、例えば従属関係の消滅や尊厳の確保といった意味で解釈される。そのため、何かしらの善が生まれることは決して奇妙なものではなく、至極当然なことである。

一方で、**より厳しい定義の水準低下批判**はどうであろうか。先の議論のなかで、水準低下によって、実際なにかの善さが生まれたとされたが、もし、水準低下批判の定義をより厳格化し、水準低下によって、いかなる面においても、帰結の中の**個人の境遇**が改善されない場合はどうだろうか。O'Neillはそれでも非内在的平等主義は水準低下批判を回避できると主張する。彼はこう述べる。

しかし、分配的平等から生じる友愛的で平等的な社会関係が、特定の個人のため、または特定の個人への利益には還元されない何らかの価値を持つものだと、私たちは考えるかもしれない。そのような関係には、**特定の個人にとっての価値だけでは尽きない**、基本的な道徳的意義があると考えることができる。非内在的平等主義者は、平等主義的考察(b) - (f)<sup>31</sup>が、分配的平等の増大が特定の個人にとって価値あるものであるだけでなく、個人にとっての価値に加え、非人格的にも価値あるものでありうる多様な方法を記述しているという見解をとることができる<sup>32</sup>。



O'Neill が論述したように、非内在的平等主義の理由の (a) – (f) の中には**個人影響以外のものも存在する**であろう。たとえば、友愛な社会関係や平等的上下関係などのものは部分的に個人の福利水準に還元できるとしても、非個人影響的なものであるように思われる。そのため、もしこれらの理由の非個人性を認めるのであれば、非内在的平等主義はこの種の厳しい水準低下批判をも回避できる。

## 7. 結論

本稿では、まず Parfit が考案した「水準低下批判」を概観した。そして、Temkin による水準低下批判の分析を紹介した。Temkin によると、水準低下批判の核心的主張は「Slogan」であるとされる。Slogan はある状況がほかの状況に比べ、より悪いといえるのは、その状況の中で誰かがより悪くなった場合に限ると主張し、帰結の評価基準を大きく制限した。そのため、Temkin は、Slogan と比例正義の概念及び非同一性問題との間に矛盾関係があることを指摘した。さらに、Slogan は非常に広い射程をもち、平等主義だけでなく、優先主義やほかの様々な理論も標的になる可能性があるとして主張した。さらに、Parfit の議論は平等主義の重要部分をカバーしておらず、水準低下批判及び Slogan は重大な欠陥があると指摘した。それゆえ、最終的には、水準低下批判による平等主義批判や、優先主義の理論としての優位性などの主張に対して反論し、Parfit の議論の有効性は危ういと結論づける。

一方、Temkin による比例正義の批判や非同一性問題の批判は、Slogan にとって致命的なものではない。Slogan の擁護者はその運用範囲を制限することで、これらの批判を回避することができる。さらに、平等は果たして内在的な価値を持ちうるのか。非内在的平等主義と目的論的平等主義のどちらを取るべきなのか。そして、平等の通貨は何なのかについて、まだ不明である。今後はこれらのことについて詳細に検討したい。

(しゅう ちえんい・哲学倫理学研究室)

## 参考資料

- 1) Parfit, Derek 2000: “Equality or Priority?”, in: Clayton, Mathew/Williams, Andrew (eds.) 2000: *The Ideal of Equality*, Macmillan, pp. 81-125; (邦訳アレク・パーフィット 2018: 「平等か優先か」, 『平等主義基本論文集』広瀬巖編・監訳, 勁草書房, 2018年, pp. 131-205 に所収 (堀田義太郎訳))

<sup>31</sup> (a) は、功利主義や民主主義と同様に、弱い平等主義的な性質を持つと O'Neill が指摘している。そのため、強い平等主義としての非内在的平等主義を保持するためには、(a) を考慮事項から除外するほうが望ましい。詳しくは、Martin O'Neill 2008: P126

<sup>32</sup> Martin O'Neill 2008: P146 筆者訳と筆者による太字

- 2) Temkin, Larry 2000: “Equality, Priority, and the Levelling-Down Objection”, in: Clayton, Mathew/Williams, Andrew (eds.) 2000: *The Ideal of Equality*, Macmillan, pp. 126-161
- 3) Temkin, Larry 1997: *Inequality*, Oxford University Press
- 4) Hirose, Iwao 2014: “Egalitarianism (New Problems of Philosophy)”, Routledge Press : (邦訳広瀬巖『平等主義の哲学』 齊藤拓訳, 勁草書房, 2014年)
- 5) Parfit, Derek 1984: “Reasons and persons”, Oxford University Press : (邦訳: デレク・パーフィット 1998 森村進訳, 『理由と人格—非人格性の倫理へ』, 勁草書房, 1998年)
- 6) Persson, Ingmar 2007: “Why Levelling Down could be Worse for Prioritarianism than for Egalitarianism”, in: *Ethical Theory and Moral Practice* Volume. 11 No. 5, Springer, pp. 295-303
- 7) Aristotle translated by Terence Irwin 2000: “*Nicomachean Ethics*”, Hackett Pub Co Inc, Second Edition.
- 8) Andrew Mason: “Egalitarianism and the Levelling Down Objection”, in: *Analysis* Vol. 61, No. 3 (Jul., 2001), pp. 246-254, Oxford University Press
- 9) Nils Holtug: “A NOTE ON CONDITIONAL EGALITARIANISM”, in: *Economics & Philosophy*, Vol. 23 Issue 1 (March 2007), pp. 45-63, Cambridge University Press
- 10) Martin O’Neill: “What Should Egalitarians Believe?”, in: *Philosophy & Public Affairs*, Vol. 36, No. 2 (Spring, 2008), pp. 119-156, John Wiley & Sons Press

